

# 行政視察報告

【視察場所】岡山県真庭市、岡山市

【視察者】森本茂樹、土井正純、小田晃士朗

## 【真庭バイオマス発電事業について】

●視察日：2015/12/24 13:30～15:30

●視察先：岡山県真庭市

説明者：林業・バイオマス事業部産業課 主任 森田学様

## 1、目的

呉市の廃棄物問題などバイオマス利活用により、解決できないか考察するため。

## 2、概要

① 真庭市役所にて説明を受ける。その後質疑応答。

・バイオマスとは

再生可能な生物由来の有機物資源（化石燃料を除いたもの）を指します。

木屑、紙くず、生ごみ、家畜の糞尿、下水の汚泥などあり、真庭市は昔から行っている林業があるため、木屑の副材が多く取り扱っている。

※素材生産事業者 20 社、民間が先導的に進めている従事者 200 名（半数が 40 歳以下）

・背景

1993 年高速道路ができる（米子道、岡山道）ため産業が外に出ていくのではないかと、との危機感から 21 世紀真庭塾（民間主導の NPO 法人化）が発足。地域の資源をフルに生かしていこうと、街並み、歴史ある林業にスポットをあて活動する。その発足 7 年後、行政が本格的に調査を開始、木質資源活用について検討を始める。情報提供、連携構築の場の提供などを行う。

・行政の役割

普及啓発がメイン、バイオマスについて考えたり触れたりする場を作るため小学校で出前講座などを行う。そこから大人へも普及。婦人会サロン会、老人クラブからも声かけをもらい、説明を行う。平成 18 年からバイオマスツアーを始め、年間 3000 人程くる。

第二にトータル実証を行うことである。

流通させる、広く薄く分散している副材を効率よく集める。トータルの仕組みを作らないとバイオマス事業は成り立たない、そのため燃料資源の実証を行う。5年間の間に燃料として出す側入れる側にメリットがあるのか、流通の仕組みを考えるようにしている。安定的に供給するということができればいい、現在は安定供給の拠点を木材組合に整備してもらい価格の安定性が確保でき、流通が安定した。

発電事業は今期からなので実績がでていない、自給率は40%と推計。

雇用、発電所に3名、バイオマスを運ぶという作業、見込、180名くらいの人員に賃金が回るとしている。発電所ができたことで地域への雇用創出へとなっている。引き続き安定的な運転を行い、継続的に行うことがポイント。

## ② 質疑応答

Q 県とはどういう関係なのか

A 岡山エコタウンプランについて国の承認を受けており、その中で真庭市は木質バイオマス事業として利活用計画を策定する上で必要な分野について参考にしている。

Q 国とは？

A 総務省の助成金を利用して事業を行っている。現在はその助成金はなくなっています。

Q 牡蠣殻は適していないと聞くが副材料としてどのようなものができしているか。

A おっしゃる通り、水分量によってエネルギーの搾取量が違ってくるが、まったく水分がないのもあまりよろしくない。木質バイオマスも燃焼は悪いほうである。

## 3、まとめ

林業で栄えた真庭市。その生業を生かしたバイオマスタウン構想・事業は非常に興味深いものであった。バイオマスに必要なことはペレット（副材）をどう集め、どう流通させるかである。真庭市にはその木材を流通させるだけの知識と経験があった、ここに当事業の成功の秘訣があるのであろう。

しかし、バイオマスタウン構想は有意義なものであるが、この真庭市の仕組みを呉市におきかえることが難しいと感じる。副材の確保、それを燃焼する施設、それを流通させる仕組みが真庭市のように整っていない、特にエネルギーとして利用できる副材が少ない。小規模な循環なら可能かもしれないが、それに対するコストパフォーマンスがしっかりしているのか、研究する必要がある。

加えて、副材は主材がないと生まれません。副材が欠乏していくなか、副材のために主材を使うなどという言語道断な逆サイクルが生まれないことを祈る。

### 【岡山県立図書館の取り組みについて】

●視察日：2015/12/25 13:30～15:30

●視察先：岡山県岡山市

説明者：館長 村木 生久様

副館長（総務・メディア課長事務取扱）石井 宏幸様

#### 1、目的

図書館利用における最新事例を学び、呉市図書館、議会図書などより発展させる方法はなにか考察する。

#### 2、概要

##### ① 岡山県立図書館事務所にて研修

###### I、施設概要

- ・平成16年9月25日新開館
- ・敷地 1327706 m<sup>2</sup> ・延床面積 1819331 m<sup>2</sup>
- ・駐車場 174 台（最初1時間無料、以後100円/h）
- ・図書収蔵能力 230 万冊（開館後20年を想定）
- ・災害時に県庁のバックアップ施設（代替災害対策本部）になる

###### II、職員

- ・行政 11 人（館長含む）
- ・司書 21 人 ・教員 6 人 ・嘱託職員 22 人 ・アルバイト 35 人

※その他含め計 108 人

※司書資格を持つ専門性ある人は 43 人 ⇒ 司書+嘱託職員

###### III、予算

図書館維持運営費 306,284 千円 維持運営費⇒委託

図書資料等整備費 123,224 千円

※資料整備費の一部はふるさと岡山応援寄付金（ふるさと納税）を財源としている。

※また当時の知事より 34 億の寄付金を受け、ほとんどはここを崩して運営している

##### ② 図書館内を歩いて見学

### 3、まとめ

来館者が日本一（2015年105万人）の理由は資料の数である。そう語る村木館長。最新の資料、古い資料、ここに求めることによって情報として手に入るというアナログ感が人を呼び寄せているのであろう。また司書の人数にも驚いたが、館長曰く、本の知識を持って対応することは当たり前であり、人員が充実することで来館者が迷わないし頼りにしてやってくる。確かにそうだと感じる。

ずっと居たくなるような開放的で明るい空間、それこそ他の図書館を圧倒する蔵書冊数、そういったハード面と、対応するスタッフの専門性と明るい接客力、ソフト面の双方が兼ね備えてある施設だと感じた。呉市に置き換えると、やはり両面とも不足している感が否めない。図書サービスへの投資を増やすべきかという問題になるが、呉市においては試す価値はあると考える。そう考えるもつもの理由は呉市図書館の立地である。呉市街の中心、駅と市役所の間点にもあり、どうしても欠かせないエリアである。そこに集客できる仕組みは必要であると感じる。規模相応。一方でエッジの効いた大幅な企画を。どちらにしる、何か動くことが人の流れを変えるものになるのではないか、そう期待する。